

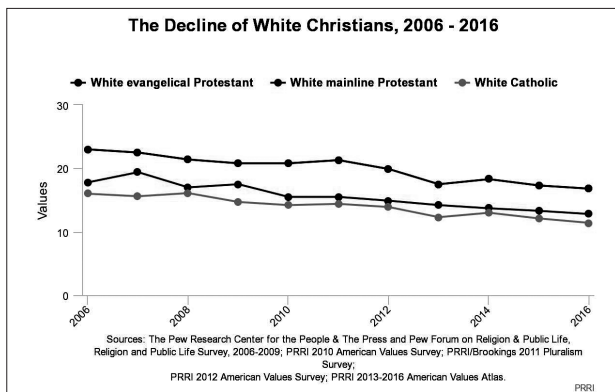
米国キリスト教の急激な変容と マイクロチャーチの試み

伊 藤 悟

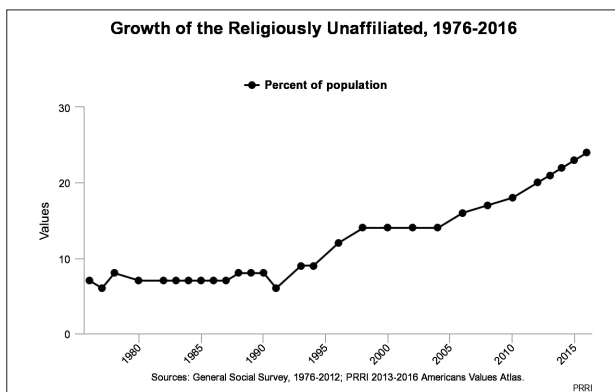
1. 過去10年の大きな変化

アメリカ宗教界は、この10年間で社会学的統計調査開始以来かつて見られなかった歴史的変容を遂げている。とりわけ宗教界を構成する人種構造の変容が顕著であることが報告された（Public Religion Research Institute=PRRI 2017 調査報告）¹。例えば、1976年にはアメリカ人口の81%は白人が占め、そのほとんどがキリスト教徒であって、白人プロテスタントだけでも55%を占めていた。しかし1996年には白人キリスト教徒は65%に減少、2006年調査では人口比54%まで減った。それでも多数派を占めていたものの10年後の2016年調査では白人キリスト教徒は43%まで一気に減少し、白人プロテスタントはわずか30%という調査結果がでた。背景別にみると、白人福音派プロテスタントはこの10年で人口比23%から17%に、白人プロテスタント主流派（メインライン）教会は18%から13%に、白人カトリックは16%から11%にいずれも減少したことになる（図表①）。

この状況は州によっても異なる。人種的多様化が進んでいる州とそうではない州とで白人キリスト教徒の占める割合は大きく異なっている。今日、白人キリスト教徒がもっとも集中している州はノースダコタ州（71%）、サウスダコタ州（68%）、アイオワ州（64%）、ウェストバージニア州（61%）、ケンタッキー州（61%）、ユタ州（61%）、ミネソタ州（59%）、ミズーリ州（58%）、およびアーカンザス州（58%）など中西部やアパラチア地方に多く見られる。逆

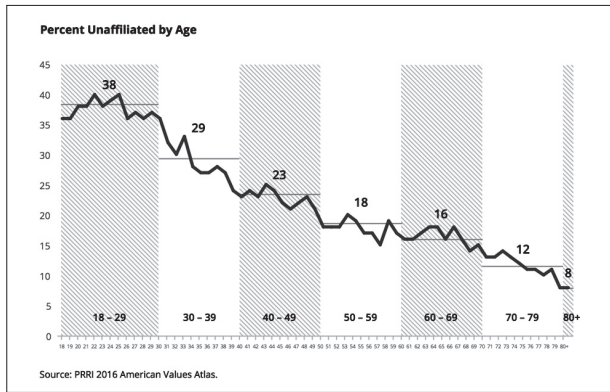


(図表①) 白人キリスト教徒の減少化傾向



(図表②) 無宗教者層の人口に占める割合 (1976-2016年)

に白人キリスト教徒の少ない地域は、ハワイ州 (20%)、カルフォルニア州 (24%)、ニューヨーク州 (30%)、ニューメキシコ州 (30%)、メリーランド州 (32%) などであり、キリスト教界の状況は州によって差異が見られる。2007年には50州中39州で白人キリスト教徒が人口の多数を占めていたが、2016年調査では半数以下の23州に留まる。多くの州で白人は多数派人種ではなくなり、マサチューセッツ州ではこの10年で白人キリスト者が20%減少した。白人キリスト者の割合を増やしたのはハワイ州だけだという。



(図表③) 年齢層別の無宗教者比率

これらの状況はすなわち、白人アメリカ人のアイデンティティをキリスト教徒と捉えることはもはやできなくなっていることを示す。多くの白人がキリスト教離れ、つまりキリスト教以外の諸宗教の信仰や無宗教を標榜するようになってきたのである（図表②）。それは年齢別の宗教信仰分布の状況を見るとさらに明らかであって（図表③）、とくに白人キリスト教会における高齢化が進み、若年層が教会から離れていく傾向が一段と強まっている。米国の総人口が増加している状況を考慮したとしても、宗教離れが顕著なのは明らかに白人の若年層であり、旧主流派教会・福音派の諸教会を問わず、この傾向を見とることができる。すでに18歳から49歳の無宗教層（どこの宗教にも属さない者）はこの世代の70%を超えており、その加速度的傾向に歯止めをかけられずにいる。

これらのことは、今後のアメリカ社会の価値観やモラル、またライフスタイルにも大きな影響を与えていくとされる。さらに地域差はあるものの、このことは白人中心に構成されてきたキリスト教会の状況が大きく変容していることを示唆するものであり、財政的に維持が厳しくなる教会が急増することが予想される。いわゆる大聖堂（カテドラル）と言われて歴史的にも大きな役割を果たしてきたいくつもの荘厳な教会が、すでに貸しオフィスやレストラン、

A Declining Share of Americans Belong to Mainline Protestant Churches

A variety of denominational families within mainline Protestantism have seen declines

% of U.S. adult pop. in mainline tradition	2007	2014
Mainline Protestant churches	18.1	14.7
Methodist	5.4	3.9
Baptist	1.9	2.1
Lutheran	2.8	2.1
Presbyterian	1.9	1.4
Episcopalian/Anglican	1.4	1.2
Nondenominational	0.9	1.0
Congregationalist	0.7	0.5
Restorationist	0.4	0.3
Anabaptist	<0.3	<0.3
Friends	<0.3	<0.3
Reformed	<0.3	<0.3
Other/Protestant non-specific	2.5	1.9

Source: 2014 Religious Landscape Study, conducted June 4-Sept. 30, 2014.

Note: All groups shown are part of the mainline Protestant tradition. Many of the families shown here include more than one denomination.

PEW RESEARCH CENTER

(図表④) アメリカ全人口に対する主流派プロテスタント教会の各宗派人口比率 (2007年と2014年の比較)

白人比率の低減傾向はさらに続くと考えられている。かつて米国のカトリック教会は、北東部に集中し、イタリアやアイルランドなどからの移民を中心に構成されていた（1972年には約7割のカトリック教徒が北東部と中西部に居住していた）が、現在ではカトリック教徒の約6割が南部または西部に住むヒスパニック系によって構成され、うち58%は50歳未満であると報告されている³。

米国最大のプロテスタント教派である南部バプテスト教会では、その会員減少率が2007年以来毎年5.5%に達している。このまま推移すると2030年までに22000近い教会が閉鎖されることになる。また二番目に大きい合同メソジスト教会も、2008年には会員数777万4千人（米国内）であったが、2017年には695万1千人となり、約10年の間で11%減少したことになる。1974年から2013年の

バー、イベント会場、図書館、なかにはリフォーム工事をしてスケートボードの練習場に様変わりしている様子などが報告されている²。メンバーを失い教会を維持できなくなっているのである。宗教離れや世俗化が加速的に進んでいる状況を見てとることができ

る。一方、この変化はヒスパニック系アメリカ人の人口に占める割合が大きくなってきていることにもよる。とくにカトリック教会では、1991年には87%が白人であったが、今日では白人は55%で、ヒスパニック系信者が36%を占めている。しかもヒスパニック系のカトリック教徒は高齢者よりも若者が多くを占め、白人家庭よりも比較的大家族で子どもが多くいることから、

40年間でみると260万人（26％）の会員を失っており、教会数も40年前は39152教会であったが約7000近い教会が閉鎖して現在では32101教会となっている。そのうち52.7％の教会はすでに毎日曜日の礼拝出席者数が50人未満である⁴。ちなみに1000人以上のいわゆるメガチャーチは合同メソジスト教会全体の0.6％に過ぎない。減少率が目立って高いアメリカ合衆国長老教会（PC(USA)）は、2000年には250万人を超える会員がいたが、2011年には200万人を切って減少率は5.7％を超え、2017年調査では141万5千人、教会数は9304教会で前年より147教会減少している。今の勢いで減少が続くと2043年には教派としての存在がなくなるとの指摘もある⁵。アメリカ福音ルーテル教会（ELCA）は、10年前には470万人いた会員が350万人（2017年）にまで減少し、100万人以上の会員を失っていて、ELCAもこのままでは30年後には教派自体が存続できなくなるという⁶（図表④参照）。

2. 無宗教への転向、伝統的教派からの流出

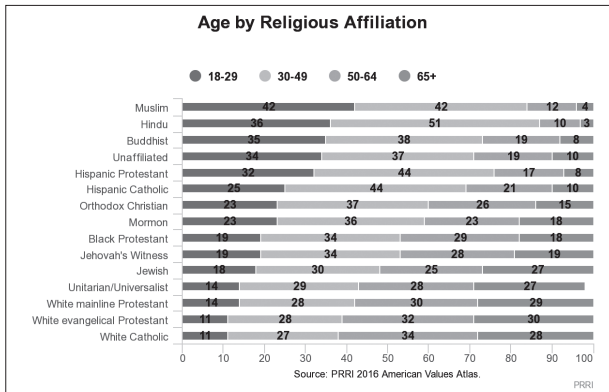
過去10年のこうした大きな変化は、明らかに無宗教者層と無教派層の極端な増大によるものである。1990年代までは特定宗教に所属していないというアメリカ人は6％程度で、その割合に長年大きな変化はなかったのだが、1990年代の終わりまでには国民の14％が無宗教を自認し、さらに加速して2012年には20％に達し、2016年調査ではアメリカ人の四分の一（25％）が宗教的なアイデンティティをもっていないという結果が出ている。とくに18～29歳の青年の10人に4人が生まれたときから宗教とは無縁の環境で育ち、65歳以上の無宗教率（13％）の3倍近くに上る。その格差は10年前より大きく広がり、現在、50～64歳の中年層と65歳以上の高齢層との間にはわずかな違いしかないものの、50歳以上の無宗教率15％に対して50歳未満の無宗教率33％という大きな差が生じている。

減少や流出がもっとも多くみられるのは白人プロテスタントと白人カトリックであり、白人の減少傾向は旧主流派教会においても福音派諸教会においても

同様である。白人以外のプロテスタントとキリスト教以外の諸宗教は比較的安定していて大きな変化は見られない。白人の「流出」現象は、必ずしも無宗教に転じていくケースだけではなく、子どもの頃に在籍していた教派とは異なる教派に移籍したり他宗教へ改宗したりすることも含んでおり、この状況は教会教育や教派教育が停滞して成果を上げることができずにきたこと、また家庭における宗教教育（信仰の継承）が上手くいっていないことなどを示唆している。

PRRI の調査によれば、彼らがキリスト教会を離れた理由として、第一に、彼らは宗教的教えを信じること自体を辞めた、第二に家族がそれほど宗教的ではなかった、第三に性的指向性に対して教会が否定的であった、第四に聖職者の性的虐待やスキャンダルをあげている⁷。また LifeWay リサーチは、大学に行くようになって教会に行かなくなった（34%）、教会の人たちが批判的・偽善的である（32%）、教会につながっている感がない（29%）、教会の政治的立場や社会問題に対するスタンスに納得できない（25%）、仕事上の責任と時間がぶつかるため（24%）と報告している⁸。但しこうした理由は複合的にも起こり得るし、子どもが育っていく家庭環境が大きく変化することにもよる。すなわち宗教的アイデンティティに大きな影響を与えるはずの家族の安定性に起因することも多く、シングル家庭の子どもたちは両親と共に生活している子どもたちに比べると礼拝やその他の宗教プログラムに出席する割合が10%ほど低いという調査結果も出ている。また両親がそれぞれ異なる宗教信仰を持っていた場合には子どもは無宗教になる傾向が強いとされる。

ところで、こうした様々な社会的な変容が認められるなか、興味深いことにジョナサン・ヒルは、若者たちが宗教信仰を獲得するかどうかはプログラム次第であることを指摘する。ヒルは次のように指摘する。第一に、ミレニアル世代の多くは無宗教を標榜したとしても宗教や霊性への関心は持ち続けているのであって、彼らの教会や宗教団体へのかかわり方が変わっただけである。第二に、教会に来る青年すべてが変化してしまったのではない。継続的に教会生活をしている青年は変わらずいるし、年に数回程度しか教会に来ない青年も減少傾向にある。第三に、ミレニアル世代は教会で幼少年期を過ごした者



(図表⑤) 宗教別世代構成比率

であっても青年後期から成人初期にかけて教会を離れる者が増えている。つまり、伝統的な教会教育プログラムや教会のシステムがミレニアル世代のライフスタイルや状況に適応しなくなっていることを問題にしている⁹。

また RSSI 2017調査によれば、若者が集まっている宗教団体はすべてキリスト教以外の団体である（図表⑤）。ムスリム、ヒンズー教、仏教はいずれも白人キリスト教会と比較すると若者の割合が多く、少なくとも三分の一は30歳未満が占めている（ムスリム42%、ヒンズー教36%、仏教35%）。また特定の宗教に関与していない者の四分の三が神または何らかの超自然的な存在、宗教的なものの存在を信じているという¹⁰。つまりキリスト教会において若年層が減少しているのは、若年層がいないのでも、彼らの宗教観に変化が生じたのでも、彼ら自身が宗教離れを引き起こしているのでもない。何らかの宗教や真理や生き方を求めている若者は多くいるのであって、キリスト教会からの若年層が減少しているのは、教会と若者たちとの間で何らかのミスマッチが起こっているせいだと言わざるを得ない。教会プログラムや教会制度がミレニアル世代のニーズに適合しておらず、彼らのスピリチュアル・ニーズに答えていないのである。これまでのやり方が通用しなくなっているとも言えよう。多くはこの「水漏れ」現象を止められずに八方塞がりになり、右往左往しているうちに時

間が経ち、悪循環をただ繰り返しているようである。

3. 教会の取り組み—合同メソジスト教会の場合—

ただしそうした状況にすべての教会が手をこまねいているわけではない。合同メソジスト教会だけを考えても、閉鎖する教会に対して新しく設置される教会（開拓伝道）も決して少なくはなく、教派としても様々な新しいアプローチ（戦略）の検討に乗り出している。例えば、数年前から次のような新しい教会のかたちを提示し、開拓伝道の推進やサポート、また様々なリソース提供を始めている¹¹。これらは従来からすると、驚くほどの提案である。

① パートナー／「親」教会戦略

既存の教会とのパートナー関係・親子関係を築いて援助し合う関係を構築する。

② 伝統的宣教師型戦略

教会のない地域に宣教師を派遣して福音宣教を行うかたち。空間的距離を越えた共同体の形成。

③ マルチサイト拡張戦略

Webサイトを積極的に用いて信仰共同体を形成するかたち。

④ チャーチ・イン・チャーチ戦略

既存の教会の建物を複数の教会がシェアして有効活用するかたち。

⑤ エリヤ／エリシャ戦略

エリヤがミニストリーの遺産をエリシャに譲ったことをモデルに、エリヤ教会が意図的にエリシャ教会のメンバーに加わって物的資産を新しい教会に移行していく遺贈型の新教会建設のかたち。

⑥ 積極的合併戦略

しばしば二つの教会を併合させても共に衰退の道をたどることがほとんどであるが、両者の建物を売却し、資金をプールし、まったく新しい伝

道拠点を設置するために活用していくかたち。まったく新しいリーダーシップも必要とされる。

⑦ 積極的閉鎖&刷新戦略

ある時点で積極的に教会を閉鎖するが、新たな建物を建てたり新しい伝道拠点を設けたりするのではなく、地域にあって地域の人々のニーズや文化に奉仕することに尽くしていくミニストリーの考案。

⑧ 家の教会戦略

家や小さな会議スペースに収まるほどの人々による家庭集会で、もっとも古いかたちの教会のあり方。牧師は聖礼典の執行のために巡回訪問する。

⑨ 意図的共同体

使徒言行録2章で語られるような土地や建物を共有する信仰共同体を意図的につくり、日常生活も共に行っていくかたち。シェアハウス型共同体の構築。

⑩ 驚きの誕生

聖霊の働きと信徒の祈りのなかで期せずして始まる新しい宣教活動のこと。

⑪ 多民族統合型プロジェクト

教会を分断してきた人種や民族の壁を破り、キリストにあって一つになることを目指し意図的に設置する集会。

これら一つ一つは置かれた文脈によって大きく異なり、またそれぞれに可能性と課題とを秘めている。少なからず従来の「教会の神学」(教会論)を逸脱するかに見える考え方も含まれ、教会論そのものの刷新やパラダイムシフトを斬新なかたちで提起するものである。たとえば土地建物にかかる経費や人件費を極端に縮小させてそれをすべて伝道のために用いたり、異なる教派教会の合併、他教派の牧師の積極的招聘、教派神学や職制に固執せず伝統主義に陥らず、教会の知名度ではなく地域の草の根的な働きとするなど、聖霊の働きの柔

軟性を重視して「教会」の定義自体を塗り替えようとする試みである。キリストの名のもとに集まる群れ、また共に礼拝を捧げたり、地域や隣人への奉仕が展開されるところであれば、それもすべて教会または教会のミニストリーとして受け止めようというのである。そもそもメソジスト教会の最初期は信徒の集会・結社から始まっている。「教会はクラブ活動でもビジネスでもなく、地上における生けるキリストの体なのである」¹²。そうになると、従来の教団・教区・支区・教会は多様なミニストリーを支えるハブ的な役割を担い、新しい教会の働きを後方支援する立場に役回りをシフトさせることが求められていくことだろう。神学的にも、伝統的な「キリストの体」としての教会の捉えなおしにチャレンジしていくことになる。伝統神学への挑戦であるだけに、教会内での批判や抵抗、議論の盛んになるところだが、キリストの体の肢体の多様性やその機能の捉え方、教会であるための最低要件を再考する手続きでもあり、すでに神学的議論を待たずにそれが既成事実化して進み始めている。これが、加速度を増す教勢減退に対する決定的な歯止めになると断言はできないものの、信仰の継承を含めた教会教育プログラムや教会そのものの再検証にもなっていくことは明らかである。

4. マイクロチャーチ・ムーブメント

次にマイクロチャーチについて取り上げてみることにしたい。1980年代に次々と設立されたメガチャーチに対して、「マイクロチャーチ」と称して展開されつつあるこの動きは、2010年前後からイギリス、アメリカ、カナダで起こってきた新興プロジェクトである。その当初から、今後マイクロチャーチが次々と設立され、マイクロチャーチ・ムーブメントが起こっていくことが示唆され、今日それが現実化し始めているのである。トッド・ウィルソンなどは、メガチャーチからマルチサイトチャーチの時代を経て、マイクロチャーチの時代へと移行していくことを2010年にすでに予見している¹³。

メガチャーチは意図的に大きな教会を作り上げていくことを目指し、既成教

会を拡張させる手法を取ってきた。またマルチサイトチャーチは、ある教会の礼拝をテレビやインターネットで配信し異なる場所、たとえばショッピングモール内などに設置されたサテライト空間で同じ礼拝を経験するタイプの教会である。おもに福音派諸教会でこれが拡がり、1990年には全米で10教会であったが、1998年には100教会に拡大、2012年までに5000教会を超えるマルチサイト教会が設立され、大規模教会はこれによってさらに宣教を拡大させてプログラムのにも資金的にも豊かになっていった¹⁴。これに対しマイクロチャーチは、意図的に小規模の一人一人の関わりを重視した信仰共同体を作ろうとする動きである。メガチャーチやマルチサイトチャーチの拡張路線に対する批判が集まったり、その拡張の流れに陰りが見え始めたりするなかで、それらとはまったく対称的なマイクロチャーチという発想がムーブメントを起こしつつある。

今日、マイクロチャーチは、シンプルチャーチ、ミニチャーチ、隣人チャーチ、オーガニックチャーチ、エッセンシャルチャーチ、プリミティブチャーチ、ダイバージェントチャーチ、モナスティックチャーチ、ハイブリッドチャーチ、温室チャーチ、ファームチャーチなど様々な名称と呼ばれ、「家の教会」とも言われる。いずれも21世紀に起こった新興のキリスト教会であり、ポストモダンの世界観を背景とし、これまでの保守主義や自由主義、教派的違いにはとらわれないことから、ポストプロテスタントという理解もある。通常は10～30名程度の小集団であり、固定した建物も組織も職制ももたず、共に礼拝し、聖餐に与かり、信仰や私生活で抱える問題について互いに分かち合うことを中心とする。家庭集会や家庭礼拝をイメージするのが近いだろう。一つの例としてニューヨーク市ブルックリンに2008年に設立されたセントリディア教会の様子を紹介しておくことにしよう。

セントリディア教会では自らを「ディナー教会」と呼び、毎週日曜日の夕方と月曜日の夕方に集まって夕食を共にする¹⁵。毎週20～30名が集まる。共に食事の準備をし、準備が整うとテーブルの上の蠟燭に火を灯し、食卓を囲んで礼拝をし、祝福してパンを分かち合い、夕食を摂りながら互いに語り合う。セン

トリディア教会では目の前の食卓が聖餐卓なのだという。そこにはパイプオルガンもステンドグラスも週報もない。互いの親密な関係を大切に、子どもたちも共に食し、ときにはホームレスの人も共に食卓につくという。人種、職業、年齢、背景、教派、性的指向、体の障がいなど一切問わず、都会の中で孤独を感じたり疲れを覚えたりする人たちが集まり、来る誰もが歓迎される。月曜日から金曜日の平日（午前8時から午後6時半まで）は、フリーランサーのための共有オフィススペースとして空間を貸与して収入を得ている。

現在、セントリディア教会はアメリカ福音ルーテル教会に所属する教会として認知されているが、当初は数名がポストモダン社会における新しいキリスト教のあり方について模索するなかで開拓伝道として始められたマイクロチャーチである。制度化され機関化された教会ではなく、信仰者の交わりに主眼が置かれ、互いにケアし合うコミュニティづくりを目指している。つまり、制度化された教会や建物としての教会に人々が集まってくるのではなく、教会が地域に出ていくこと、そこで信仰者コミュニティを形成すること、そのこと自体が「キリストの体」を作り上げていることになると考えている。セントリディア教会は、ディナー教会が、ニューヨーク市民の大半が共有している文化のなかでの対抗文化的ポリス（古代ギリシアの都市国家）であり、既存教会での教会生活に疲れた人々が集まって信仰について語り、イエスを信じてパンを分かち合う聖なる結社であると受けとめている¹⁶。

5. マイクロチャーチの特徴

いまだマイクロチャーチの明確な定義は存在していない。アイディアもまだ流動的である。また1990年代に教会成長の方策としてメガチャーチや福音系教会で盛んになったセルチャーチ・ムーブメントとも異なる。単純に小規模教会のハンドメイド教会といったものもあれば、信徒数名が集まって月に一度食事をして分かち合いをしたりするだけの不定期集会もある。また大規模教会が意図的にマイクロチャーチを設置したケースもある。リベラルであるか保守であ

るかを問わず、プロテスタント旧主流派、福音派系、カトリック教会をも超えたネットワークとして、様々なモデルのマイクロチャーチのかたちが模索されている。先述したようにメソジスト、ルーテル、メノナイト、長老派、バプテストなどの各教派もこの動きを承認し、かつ積極的に推奨している。いまのところ、それらは総称してマイクロチャーチと呼ばれている。伝統的な教派教会の高齢化や教勢減退はこれに勝る勢いで進んでいるものの、マイクロチャーチの草の根的な宣教展開も勢いをもって進められている。マイクロチャーチは、親密な関係をもてるほどの小さなボランティア集団であり、非公式に設置された意図的・合理的なコミュニティである。その具体的な状況や実態をすべて把握することも、統計的な分析をするのも困難である。というのも、マイクロチャーチ自体がまだ実験的であり、一人が複数のマイクロチャーチに関わることもあれば、家庭集会のような極めて小規模な集まりも多く存在し、決まったプログラムや枠組みを持たず、チャーチという概念そのものが多様で多面的だからである。

エレイン・ヒースらは2009年に Missional Wisdom Foundation (MWF) を設立して、キリスト者共同体の代替形態について模索し始めた¹⁷。MWF では従来の階層化したリーダーシップではなく、リーダーシップをクラスタ化する方策を提案し、新しいコミュニティを植林していくプロジェクトを展開している。MWF はこれまでに、居住型（シェアハウス）のかたちをとって複数の家族や単身者が老若男女を問わずに住み込んで信仰共同体を形成するエプワース・プロジェクト、毎週日曜の夜に一つの家庭に集まって食事を分かち、聖書の学びと祈りを共有する非居住型のニューデイ・ハウスチャーチ、障がい者と障がいのない者が共に共同生活をするジュリアン・ウェイ、里親制度と連携しながら傷ついた子どもたちと生活を共にして彼らのトラウマ・ケアをするファウンドリーハウスなど、信仰に生きる様々な共同体を設立し、マイクロ共同体の研究と検証をメソジスト教会の信仰に基づいて展開することを試みている。エレイン・ヒースとラリー・ドゥギンズによれば、われわれの文化やエクレシヤ的文脈の中では、もはやアカデミーも、教会も、宣教も、修道院も、明確な

区分がなくなっているという¹⁸。「教会」「キリストの体」の概念や枠組みを捉え直し、信仰共同体が多様な形態をとるようになってきた一つの実例である。

それでも総合するとマイクロチャーチには次のような共通した特徴があるといえよう。

① 三位一体を基調とした教会論

三位一体論を基調としている点で極めてオーソドックスな信仰を堅持するが、特定の形態やスタイルよりも、親密さ・素朴さ・柔軟性をもってキリストの弟子として歩むことを目指し、心をつ一つにして礼拝し、「家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美」（使徒2：46）していた初代の信仰共同体をことさら意識してそれに近づこうとする。

② ポストモダン、クリステンドム以降を意識した教会刷新運動

虚偽や不正や不義に満ちた世界のなかで真実を語り、競争や争いのなかで互いに愛し合い、個人主義や多元主義が横行するなかで共に生きることをめざす。キリストを模倣し、キリストの体をあえて小さな群れとしてつくり上げていくという対抗文化的ムーブメントである。多様な人々を受け入れ、対話の機会を多く設定して平和を実現しようとする。

③ 制度・職制・伝統によるつながりではなく愛と霊による結合

キリスト教会はその大部分を枠組みのある集合体として考え組織化することに力を注いできたが、制度・職制・伝統・教義・教派はしばしば対立を生み出し、異教徒との衝突、キリスト教内部での論争・分断・抗争を生み出してきた。マイクロチャーチは超教派・脱教派的な信徒主体の教会形成であって、教会内の人間関係や諸問題に疲弊した人たち、教会の複雑さや制度に疑問を感じている人たちが始めた愛と聖霊に基づく共同体である。従前どおりの教会生活をしながらマイクロチャーチに加わる者も少なくない。マイクロチャーチ自体、そうした教会籍に縛られたり、慣習や習俗や既成概念に振り回されることと無縁である。

④ 食事・時間・空間・経験・証しの共有

多くの場合、教会の建物を持たず、家、レストラン、その他の中立的で居心地がよくアクセスのよい場所に集まる。共に聖書を読み、賛美をし、祈り、楽しく食卓を囲んで経験を分かち合う。深刻な話題もあれば他愛もない世間話もあり、日々のそれぞれの物語を共有する。さながら食卓を囲んで家族が団欒するイメージであって、多くで語り合うこともあれば、食後のコーヒーを飲みながら二人三人で話し込むこともある。互いに分かち合い共有するという仕方では聖徒の交わりを実現する。固定したプログラムもなく、おおよその集合時間と解散時間が設定されているだけである。組織が単純であればあるほど、共有する時間や空間は増えると考ええる。

⑤ 賜物を用い、霊性の成長をめざす

参加する人々の霊的成長を促し、それぞれに与えられている賜物を生かし合えるように互いに配慮する。神の前にすべての信者が等しく祭司的役割を担い、多くは有給の牧師やスタッフを置くことはない。組織や階級や序列もなく、基本的にボランティアベースで運営され、それぞれができることを探して成していく。誰もがもてなし、誰もがもてなされる。それだけに集まる人々の関与（コミットメント）は高く、受動的ではなく誰もが能動的に関わる。

⑥ 福音主義的・宣教的・伝道的な共同体

使徒的使命によって形成されるマイクロチャーチは、信仰と日常生活を結び付けようとし、伝道的（ミSSIONナル）であろうとする。建物や人件費をかけないことから、これまで教会のなかった地域、聖職者のいないところにも形成することができ、マタイ28章のイエスの大宣教命令に従おうとするものである。制度や伝統への信仰ではなくキリストの福音を信じる群れであり、誰でも歓迎され、新来者や社会的弱者や子どもたちも寛容に受け入れる準備がある。異教徒らと共に食事をするということにも積極的である。

6. マイクロチャーチの課題と展望

既成教会の減退傾向が続くなかには、こうした新しい試みに期待するところが大きい。これがキリスト教会の危機を救う力に直結するかどうか、また、新たな宗教改革や信仰覚醒運動にまでつながるかどうかについては懐疑的な声もある。既成のものへの反動であることから、逆に既成教会や既成神学からは懸念する声も多く上がり議論の対象となっている。例えば、J・リー・グラディによれば、マイクロチャーチは既存教会を批判することによって歴史の積み重ねや、過去の聖霊の働きを無視し、いま開発途上国で成長している教会も神が認証したすべての聖職者の働きも無用なものとする。それはアナキーであってイノベーションではないとする¹⁹。既成教会を擁護しようとする批判である。またアンディ・ホギューは、マイクロチャーチは一人一人の負担が大きく、少人数の親密な関係を重視するものの、人間関係は時間の経過とともに変化することも多く、関係が壊れたときにはその人は行き場所を失うことになる。現代人にとって課題を共有することは容易なことではなく、少人数の集合体はとかく個人的・感傷的なものに振り回され、それがイデオロギー的になったりカルト的にならないという保証もなく、それを評価したり歯止めをかけたりするものもないので危険だと述べる²⁰。草の根的運動はそれが根付かないことの方が多く一過性の感傷的なものであるという指摘である。

伝統的神学の立場からするとサクラメント理解も教会論も曖昧であり、「パン裂き」を重視するがそれは復活顕現後のパン裂きに由来するだけで最後の晩餐の席上での聖餐制定に基づくものではない。バプテスマについても聖礼典としての位置づけが希薄であるように感じさせられる。また聖書を取り上げるものの、しばしば表面的な聖書理解にとどまり、きちんとした神学教育を経ていない人が導く危うさや、それが異端やカルト信仰につながる危険性も確かに懸念される。マイクロチャーチごとの違いも大きい。トレルチのいうところの「神秘主義」（宗教的体験の直接性）が、かたちを変えて現れたのだという見方もできる。それぞれに特徴があり、結局のところそれぞれの教会が判断の基準

となって「ラディカルな無組織の個人主義」を結果することにもなり得る²¹。既存教会への問題提起ではあるものの、多かれ少なかれ不特定多数の人が出入りするようになれば組織化や規則化が要求されることにもなろう。結局のところ個人主義に陥るか、組織化の道を辿るか、いずれかしかないのかもしれない。

だがムーブメントとしてはすでに看過できないものであり、今後内容的にも神学的にも整えられていくことを期待しなければならない。先述したセントリディア教会は、すでに福音ルーテル教会との連携を強め、神学教育を受けた牧師が教会形成にコミットするようになった。また、旧主流派、福音派を問わず米国のいくつかの神学校で、開拓伝道（church planting）を担う伝道者を育成するコースを創設しはじめており²²、かつてとは異なって、様々な開拓伝道スキルを共有するためのネットワークも次々と構築されてきた。今後さらにマイクロチャーチの設置数は増えていくことだろう。

7. まとめにかえて

筆者は在外研究中に米国のいくつかの新興のマイクロチャーチを訪ねる機会があり、礼拝に出席し、牧師や教会リーダーらのインタビューを行ってきた。いずれも滞在していたノースカロライナ州ダーラム近郊でここ5年以内に設立された教会である。

「ダーラム教会」²³は閉鎖した長老派教会の会堂をもう一つのヒスパニック系の教会と共同で再利用し、午前と午後に分かれて礼拝を行っている。礼拝堂の中央に聖餐室を配置し、それを囲むように椅子が並べられ、かつての講壇部分は賛美をリードするバンド席として用いられている。決まった式文はなく、会衆も牧師もラフな格好で集まる。じつにフレンドリーな教会であり、互いの協力関係も強い。とくにこの教会には精神的な障がいを持つ人たちも多く集まっている。公式の集会は日曜日の礼拝だけで、週日は、牧師は家庭訪問を重視している。

「オーク教会」²⁴は毎週必ず二つの食事がもたれる。聖餐と愛餐である。礼拝後の持ち寄りランチョンも礼拝の延長線上にある聖徒の交わりの重要な柱としてとらえている。こちらも閉鎖した教会の建物を3つの異なる教会でシェアして4年前から始められた開拓伝道教会である。毎週20名ほどが集まり、賛美はギター2本とスクリーンに映し出されたスライドでリードされる。礼拝はいたってシンプルで、賛美、祈祷、聖書朗読、メッセージ、聖餐、派遣だけである。

「レストレーション教会」²⁵はレストラン&バーの建物を日曜日午前だけ借用して礼拝を行っている。レストラン&バーであることからライブショーのためのステージや音響システムがすでに整っており、その他の教会用品は牽引車両で毎週運び込んで礼拝準備を整え、午後のレストラン開店までに片付け撤収を完了させる。礼拝後に説教の感想を述べあうシェアリングの時間（10分ほど）を大事にしている教会であり、25名ほどが礼拝している。

「シティウェル教会」²⁶は、閉鎖したメソジスト教会の建物を用い、ともに朝食を食べるところから始まる。6年前に始めた開拓伝道教会であるが、すでに礼拝出席者は200人近くにのぼり、英語とスペイン語のバイリンガルで行われる礼拝は活気に溢れている。白人・黒人・ヒスパニック系・アジア系の多様な人種が乳幼児から高齢者まで集まり、牧師だけではなく信徒も礼拝メッセージを語り、それぞれの日常生活のシェアリングタイムも礼拝の中で設けられている。

「ファームチャーチ」²⁷は特異な興味深い教会である。礼拝は住宅地の中にあるNPO施設を日曜日午前だけ借用して行われる。道を挟んで向かいにある畑で1時間ほど畑仕事をして汗を流してから屋内に入り、礼拝を行う。この土と汗にまみれての礼拝には毎週15～20名程が集まる。共に汗を流すことで明らかに互いのコミットメントは高められ神の創造を経験していく。この教会を始めた牧師は癌を患い、志半ばにして後継牧師に後を譲ることになったが、この二人の牧師のために礼拝の中でメンバーが必死に祈っている姿は印象的であった。

他にも紹介すべき新興の教会はいくつもあるが、これらに共通しているのは、独自の建物をもたないこと、聖餐式を毎週礼拝の中心に据えていること、礼拝形式がシンプルでメッセージも20分を決して超えないこと、牧師も含めメンバーの距離が近いこと、ほぼ毎週食事を共にすること、多世代・多人種の人々がバランスよく集まっていること、メンバーすべてが能動的に教会形成に関わっていること、ホスピタリティに富んでいること、そしていずれも所属する教団名を掲げていないことなどである。たとえ教派的な背景やサポートがあるとしても、新興の開拓伝道教会では教団名や教派的背景を表に出さないことが多い。教派や教団名によるステレオタイプの受け止められ方を避けるためであろう。

こうした新興の開拓伝道教会やマイクロチャーチ、ハウスチャーチの新しい試みはまだ始まったばかりで孤軍奮闘している状況のため、正しく評価するには時期尚早である。しかし手詰まり状態の米国キリスト教会の歩みにわずかながらの光を灯し始めていることは明らかである。宗教への警戒心が根強く、右傾化する日本において同じ方策を適応させられるかについては慎重に検証していかなければならないが、むしろその始まりから社会的文化的マイノリティとして歩んできた日本のキリスト教会やキリスト者は、クリステンドム以降の欧米のキリスト教界にアドバイスするものを多く持ち合わせているように思われる。注意深く推移を見守り、時代を見きわめつつ、キリストの体がこの世で実現されていくことを引き続き祈り求めている。

-
- 1 Jones, Robert P., and Daniel Cox, *America's Changing Religious Identity*, Public Religion Research Institute, 2017 (<https://www.prri.org/research/american-religious-landscape-christian-religiously-unaffiliated/>).
 - 2 例えば、Evan Nicole Brown, "How a St. Louis Church Became a Skate Park: Welcome to heaven on earth for skaters," (<https://www.atlasobscura.com/articles/how-a-st-louis-church-became-a-skatepark>).
 - 3 *America's Changing Religious Identity*, PRRI 2017および *2014 Religious Landscape Study*, Pew Research Center の調査データによる。
 - 4 Lauren Arieux, "The United Methodist Church, a 40-Year Overview," *General Council*

- on Finance and Administration of the United Methodist Church, 2015 (http://s3.amazonaws.com/Website_GCFA/Data_Services/UMC_40YearHistoryDiversity.docx).
- 5 Chris Backert, "Just How Much are Denominations Declining?" *Fresh Expressions*, 2015 (<https://freshexpressionsus.org/2015/05/26>).
 - 6 Mark Tooley, "Liberal Lutherans Doubling Down," *Juicy Ecumenism*, July 29, 2018 (<https://juicyecumenism.com/2018/07/29>).
 - 7 PRRI 2017 survey.
 - 8 Aaron Earls, "Most Teenagers Drop Out of Church as Young Adults," based on "Church Dropouts: Reasons Young Adults Stay or Go between ages 18-22: Survey of 2,002 Young Adults Who Attended a Protestant Church Regularly in High School," *LifeWay Research*, 2017 (<https://lifewayresearch.com/2019/01/15/most-teenagers-drop-out-of-church-as-young-adults/>).
 - 9 Jonathan P. Hill, *Emerging Adulthood and Faith*, The Calvin College Press, 2015, p. 25ff.
 - 10 *Ibid.*
 - 11 "Church Planting Strategies," Discipleship Ministries, The United Methodist Church (<https://www.umcdiscipleship.org/new-church-starts/strategies>).
 - 12 Elaine Heath and Larry Duggins, "Missional. Monastic. Mainline.: a guide to starting missional micro-communities in historically mainline traditions," Cascade Books, 2014, p. 49.
 - 13 Todd Wilson, "A Micro Manifesto," *Exponential*, 2010.
 - 14 Jennifer Ludden, "Big Churches Use Technology to Branch Out," *NPR*, 2005 (<https://www.npr.org/templates/story/story.php?storyId=4788676>). Doxa Deo Church や Hillsong Church はいずれもマルチサイト教会であり、その高いエンターテインメント性や独自のワーシップ音楽、最新の音響映像テクノロジーを駆使した独自の礼拝スタイルによって会衆を魅了する教会として関心をもたれている。また、その資金力をもって学校や神学校、孤児院などの児童青少年施設などを国内外に設立し、独自のビジョンとカリスマ的牧師のリーダーシップのもとに社会的にも大きな影響を与えている。ただし聖書的な信仰共同体の形成への関心は低く、匿名性が高く、フランチャイズの拡大という資本主義社会の競争モデル（拡張路線）の上に成り立っている点で批判も大きい。
 - 15 セントリディア教会公式ウェブサイト <http://stlydias.org/>
 - 16 Emma Green, "The Secret Christians of Brooklyn: At St. Lydia's church, every service is a dinner party, and believing in Jesus is counter-cultural," *The Atlantic*, Sep 8, 2015 (<https://www.theatlantic.com/politics/archive/2015/09/st-lydias-microchurch-brooklyn-secret-christians/404119/>).
 - 17 <https://www.missionalwisdom.com/> エレイン・ヒースは、合同メソジスト教会牧師、デューク神学校前校長・宣教と牧会学教授、Missional Wisdom Foundation 創設者。
 - 18 Heath and Duggins, "Missional. Monastic. Mainline," p. 57.
 - 19 J. Lee Grady, "Barna's Dangerous Proposal," *Charisma, the Wayback Machine*, May 31,

- 2006 (<https://www.charismamag.com/blogs/fire-in-my-bones/1919-barnas-dangerous-proposal>).
- 20 Andy Hogue, "5 Reasons Why You Should Not Join a House Church," January 12, 2016 (<https://www.seedbed.com/reasons-you-should-not-join-a-house-church/>).
- 21 森本あんりがトレルチの「神秘主義」を取り上げて議論している。「トレルチ自身の言葉によると、この類型は、『宗教的体験の直接性、すなわち祭儀、教義、制度の客観性に満足しない感情の内面性』を第一義的に尊重する宗教性のことである。そしてこれが、『直接的な宗教体験に根ざす、ラディカルな無組織の個人主義』を結果する」。森本はまた、「つまり現代は、チャーチやセクトではなく、そういう組織を形成しない個人主義こそが宗教の本義となった時代である」と述べている（森本『異端の時代——正統のかたちを求めて』岩波新書1732、岩波書店、2018年、215-16頁）。
- 22 デューク神学校では2018年度より Certificate in Mission Innovation（「新しいかたちのミニストリーと開拓伝道」のための資格認定プログラム）を開始した。マイクロチャーチや開拓伝道の働きに関心のある学生に、理論と実践を伴った集中指導を行おうとするもので、伝道者育成課程（M.Div.）の学生が履修できる。
(<https://divinity.duke.edu/academics/certificates/missional-innovation>)
- 23 <https://durhamchurchnc.org/>
- 24 <http://www.oakdurham.org/>
- 25 <http://www.restorationchurch.us/>
- 26 <https://www.citywell.org/>
- 27 <http://www.farmchurch.org/>